巻頭言

外交の歴史と現在を繋ぐ架け橋として

外交史料館長　山本　英昭

二〇二五年は、一九四五年の終戦、そして国際連合の設立から八〇年という、激動する国際社会にとって重要な節目の年でした。この歴史的な機会を記念して、外交史料館では特別展示「平和国家としての歩み」を開催し、戦後国際社会への復帰を果たした日本が、国際連合との関係や政府開発援助（ＯＤＡ）等を通じて果たしてきた平和国家としての取組や姿を紹介しました。その関連で、日本の対国連外交史研究の第一人者である潘亮筑波大学教授を講師としてお招きし、研究会を開催しました。また、当館が所蔵する降伏文書の原本は、大分県立先哲史料館の戦後八〇年記念企画展「先哲・重光葵」で展示されました。これらの取組は、戦後日本と国際社会の歩みを振り返る点で、意義深いものであったと考えます。

特別展示としては、日韓国交正常化六〇周年の記念展示も開催した他、展示室のリニューアルオープン一周年を記念し、吉田茂元総理の特別展示を開催しました。当館が所蔵する、かつて大磯の吉田茂邸に置かれていた高さ幅共に約二メートルの衝立は特に関心を集め、メディアでも取り上げられました（本誌三五頁以降の特別展示記事を参照）。

更にはグアテマラの大統領が来訪され、同国に関連する史料を閲覧しました。これは二〇一九年のリトアニア大統領以来の国家元首の当館来訪となりました。加えて、各国の駐日大使等が訪れるなど、外交史料館は国立公文書館等としての日常的な任務や外交史料の編纂に関する事務を行いながら、外交の現場としての役割も果たしました。本館報を通じて、その活動の一端をご覧いただければ幸いです。

現館長名での巻頭言は今回が二回目で最後となります。圧倒的に在外勤務（中東・北アフリカのみ）が長く、外交の最前線に従事し続けた後の最後のポストでは、微力ながらも国民の皆さまとの関係を最も大切にして奉仕しました。外交史料館には、日本各地から小中高生も含む多くの人々が訪れ、日本の外交史に親しんでいただいています。今後も、外交史料館は、日本外交の歴史と現在を繋ぐ架け橋として、日本外交への国民の皆さまの理解を促進するため、より一層の努力を重ねてまいります。皆様におかれましては、引き続き当館の活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二六（令和八）年三月